

音楽指導の研究 －指導内容及び教授法－

三村 則子・平田 博通・根岸 恭子
増崎 靖子・庄司 妃佐

1. はじめに

本学福祉総合学部福祉総合学科子ども福祉コースは、2007年度より指定保育士養成施設として開設され、2010年度に完成年度を迎えた。本学の建学の精神である「学ぶことを通しての人間形成」を基盤として、個別的・集团的・地域的な援助技術を実践できる保育士の養成が大きな目標であるが、音楽教育に関しては、保育士養成のカリキュラムの中で、必修科目である4系列の基礎技能4単位中の2単位を「基礎技能（音楽）」として1年次に配当している。また、「基礎技能（造形）」「基礎技能（体育）」はそれぞれ1単位として2年次に配当している。さらに3年次配当として、音楽の選択科目「音楽演習」（2単位）を置いている。

子ども福祉コースは、2010年度に幼稚園教諭免許一種の認可を受け、2011年度からの入学生は幼稚園教諭免許一種も取得できる。それに伴い音楽教育のより一層の充実が求められている。

本稿では、保育士養成施設としての開設4年を経て、学生への音楽指導をどのように実施してきたかを振り返り、本学における音楽指導の展望・考察を行うこととする。

本学の指定保育士養成課程における音楽教育は、専門分野が異なる非常勤の4人の教員によって総合的に教育されている。本稿においてそれぞれの専門分野を基に、2「ピアノ初心者における指導について一事例を通して」（三村則子）、3「ピアノ既習者における指導について」（平田博通）、4「音楽の総合的能力指導—童謡、歌唱について」（根岸恭子）、5「音楽指導における「手遊び歌」と「合奏」（増崎靖子）に分担して執筆した。そして、6「音楽指導における課題についての考察」（庄司妃佐）では、保育士養成においてこれまで実施してきた音楽教育を総括し、幼児教育の中での音楽教育についての課題をまとめた。

2008年4月1日より施行された厚生労働省による「新保育所保育指針」¹では、音楽教育に関する項目として、「第7章 3歳児の保育の内容」において、「(1)身の回りの様々なものの音、色、形、手ざわり、動きなどに気づく。(2)音楽に親しみ、聞いたり、歌ったり、体を動かしたり、簡単なリズム楽器を鳴らしたりして楽しむ。」と記述されている。また、「第8章 4歳児の保育の内容」において、「(1)様々なものの音、色、形、手ざわり、動きなどに気づき、驚いたり感動したりする。(2)友達と一緒に音楽を聴いたり、歌ったり、体を動かしたり、楽器を鳴らしたりして楽しむ。」とされ、「第9章 5歳児の保育の内容」において、「(1)様々な音、形、色、手ざわり、動きなどを周りのものの中で気

づいたり見つけたりして楽しむ。(2)音楽に親しみ、みんなと一緒に聴いたり、歌ったり、踊ったり、楽器を弾いたりして、音色の美しさやリズムの楽しさを味わう。」とされ、年齢に応じて、子どもが表現活動を行うに際して、音楽に対して子どもがもつ潜在的な能力を引き出し、楽しさや創造性を伴った音楽指導ができることが目標と定められている。

また、保育所と対象の年齢が重なる幼稚園の教育の目安となる文部科学省の「幼稚園教育要領」²においては、「第2章 ねらい及び内容」の中で、「表現」として「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」とされている。そのねらいは「(1)いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ。(2)感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。(3)生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。」とされている。

保育士養成課程のカリキュラムの改正からみると、指定保育士養成施設においては、厚生労働省告示第278号(2010年7月13日付)により、児童福祉法施行規則第6条の2第1項第3号の指定保育士養成施設の修業教科目及び単位数ならびに履修方法が改正され、2011年4月1日から適用されることになった。その中で、音楽教育に関わる部分としては、従来用いられてきた「基礎技能」が「保育の表現技術」と変更されている。この改正を受けて、本学も2011年度より教科目名を変更し、従来の「基礎技能(音楽)」は、「保育の表現技術(音楽)」と名称変更した。さらに本学福祉総合学部福祉総合学科子ども福祉コースは、2010年度に幼稚園教諭一種免許の認可を受け、音楽教育に関しては、その中の教科に関する科目区分の中で、「音楽入門」と「音楽演習」を新たに加え、幼稚園免許のための必修科目として「音楽入門」「保育の表現技術(音楽)」「音楽演習」をそれぞれ2単位の演習授業とし、全部で6単位を必修でおくことになる。

このように2011年度から、本学子ども福祉コースは音楽教科目が増加し、これまでの指定保育士養成課程の保育士養成のための音楽教育に加えて幼稚園教諭一種免許の教育も加わり、更なる充実が求められている。そのため、本学で学ぶ学生が、「音楽」を通して幼児の感性をはぐくみ、表現する喜びを養うための良き保育者・幼稚園教諭になるために、どのような技術をもつことが必要であり、その技術はどのような教授法で学ぶことができるかについて考察する。

2. ピアノ初心者における指導について ―事例を通して―

1年次必修科目の「基礎技能(音楽)」の具体的な課題は、課題A「バイエルピアノ教則本」、課題B「童謡唱歌の弾き歌い」を修得することを目標としている。実際にこの課題に沿って指導した学生2名を例にあげて、指導の成果、考察を述べることとする。

「基礎技能(音楽)」を履修した者はピアノ初心者が多く、その指導として課題A「バイエルピアノ教則本」、課題B「童謡唱歌の弾き歌い」を修得することを目標としている。「バイエルピアノ教則本」とは、フェルデナント・バイヤー(バイエル)(1803~1863)によって書かれた教則本であり、作者自身「初歩の入門者として1,2年勉強するだけの材料を集めた」と明言している。鶴川一郎³によると、

バイエル教則本は大きく二つに分かれている。

第Ⅰ部ではピアノのキー（鍵）に触れることと同時に、ソルフェージュ教育（ここでのソルフェージュとは楽典を学び、機能と和声の初歩を感得し、視唱・聴音の訓練を受け、音楽の全体像を原始的な姿から捉えることである）に主眼がおかれている。第Ⅱ部は手と指の訓練が主眼となる。テクニックの点から見ると、跳躍や順次進行、三度・六度の重音、弾く速さ、旋律を分散和音の最初の音に乗せて運ぶ方法、そして音楽の基本原則である対比を表現することが求められる。

授業では、106曲ある「バイエルピアノ教則本」をレベル別に5段階に分け（Ⅰ・・・No.1～No.44、Ⅱ・・・No.45～No.69、Ⅲ・・・No.70～No.84、Ⅳ・・・No.85～No.99、Ⅴ・・・No.100～No.106）、それぞれのレベルの中で学生に特に学習したい曲を選ばせ、それを「課題A」とした。これらの曲を段階的に修得することは、楽譜の読み方を学び演奏に関わる基礎力や音楽表現の手法を会得する上で必須である。換言すればこれらをマスターすることは保育者として身につけるべき資質（童謡の伴奏やマーチ、アニメソングなどを自在に弾くことができる能力）を備えるための有効な手段である。「バイエルピアノ教則本」を教材に選んだ理由は、限られた時間の中で楽譜の読譜力とピアノ演奏の技術力、表現力を見につけるために非常に適していること、さらに保育士の採用試験に課題曲として出されることが多いからである。

課題Bは童謡唱歌の弾き歌いである。「基礎技能（音楽）」の中では、課題Aと課題Bを学ぶが、この章ではピアノ等の鍵盤楽器の未経験者（学生1）と小学校低学年時代に約2年間ではあるがピアノを学んだ経験のある学生（学生2）へのピアノ指導における経過、成果、課題を検討することとする。

学生がそれぞれに習得した課題Aの内容を30コマの授業の中で表したものが＜表1＞である。

<表 1>

	学生 1 (未経験者)	学生 2 (経験者)
1	バイエル 12 番	バイエル 12 番
2	・ピアノの基礎的奏法 (姿勢、手のフォーム、脱力) ・楽譜の読み方 (拍子、音の高さ、リズム、指使い)	・ピアノ奏法における癖の是正 ・バイエル 12 番の実践
3	・バイエル 12 番の練習方法	バイエル 48 番 ・片手練習
4	バイエル 48 番	・ハ長調のⅠ度Ⅴ度
5	・ピアノの基礎的奏法 (左手の分散和音、ハ長調のⅠ度Ⅴ度)	・楽譜の読み方 (四分の三拍子、付点のリズム)
6	・楽譜の読み方 (四分の三拍子、付点のリズム、タイ)	バイエル 78 番
7	・リズム打ちの練習	・ピアノの基礎的奏法 (和音の弾き方、f と p の弾き分け)
8	バイエル 78 番	・楽譜の読み方 ((八分の六拍子へ音記号)
9	・ピアノの基礎的奏法 (和音の弾き方、f と p の弾き分け)	・表情記号の理解とタッチ
10	・楽譜の読み方 (八分の六拍子へ音記号)	バイエル 91 番
11		・ピアノ基礎的奏法、・楽譜の読み方 (イ短調と中間部の転調、・16 分音符のリズム (バスの保続、メロディと伴奏のバランス、調性の変化の音色作り)
12		・脱力の指導 ・メロディと伴奏のバランス
13		・調性の変化の表情づけ
14		バイエル 102 番
15		・楽譜の読み方 (へ長調臨時記号リズム複付点、16 分音符の細かいパッセージの弾き方)
16	バイエル 91 番	・練習のポイント (7～8 小節目を取り出して練習)
17	・ピアノ基礎的奏法	・リズム練習 (テンポの設定の仕方)
18	・楽譜の読み方 (イ短調と中間部の転調)	
19	・16 分音符のリズム (バスの保続、メロディと伴奏のバランス、調性の変化の音色作り)	
20	・脱力の指導	
21		
22		
23	バイエル 102 番	バイエル 104 番を練習 (学生 2 のみ)
24	・楽譜の読み方 (へ長調臨時記号リズム複付点、16 分音符の細かいパッセージの弾き方)	
25	・練習のポイント (7～8 小節目を取り出して練習)	
26	・リズム練習 (テンポの設定の仕方)	
27		
28		
29		
30		

譜例 1 バイエル 12 番

(全訳バイエルピアノ教則本 pp.26 全音楽譜出版部編 全音楽譜出版社 1955 を底本として作成)

楽譜の読み方として、ト音記号、拍子記号、調性、速度記号、小節線、終止線といった基礎知識を覚える。ピアノの奏法として、座り方、良い手のフォーム、指番号、音符と鍵盤との位置関係、指の動かし方を学ぶ。バイエル 12 番は四分の四拍子を感じ、最初に右手と左手を別々に弾けるようにしたのち両手で合わせる練習をする。

学生 1 は全くの初心者である。ピアノを弾く時に指の形が伸びてつぶれるため、手の平の天井を高く保たせ、指の独立を図り 1 本ずつ上げ下げして弾くよう徹底させた。学生 2 は小学生低学年のころ約 2 年間ピアノを経験したので鍵盤の位置が頭に入っていて、読譜もト音記号は読めるため、力を抜いて弾くなど弾き方の癖の是正に時間を費やすことでスムーズに両手の練習に進んだ。

譜例 2 バイエル 48 番

(全訳バイエルピアノ教則本 pp.41 全音楽譜出版部編 全音楽譜出版社 1955 を底本として作成)

バイエル 48 番は、楽譜の読み方として四分の三拍子、付点のリズム、タイを覚える。ピアノの奏法として、左手が分散和音になりハ長調の I 度(ドミソ)、V 度(シレソ)の機能 and 声 を学ぶ。

学生 1 は付点のリズムがとれないため、リズムだけ取り出してリズムうちを行ったところ良い効果が出た。

譜例 3 バイエル 78 番

Allegretto

8 分の 6 拍子

f 強弱記号

dolce 表情記号

legato

大譜表

へ音記号

(全訳バイエルピアノ教則本 pp.56 全音楽譜出版部編 全音楽譜出版社 1955 を底本として作成)

バイエル 78 番は、楽譜の読み方として、右手がト音記号、左手がヘ音記号の大譜表について、八分の六拍子、調性はト長調、また強弱記号 (*f*、*p*、*cresc.*、*dim.*)、臨時記号 (*b*、*#*) について学習する。また、中間部でニ長調に転調するので、ABA の形式の中で表現の対比が求められる。

学生 1 はヘ音記号が読めないため、ヘ音記号を中心に学習した。五線を線と間に分けて読譜の練習をしたところ、ト音記号と混同せず読めるようになった。学生 2 はヘ音記号の読譜はスムーズにできたので、2 小節ごとにハッキリした感じと優しい感じのタッチの対比を学習したところ、表現に幅がで感情の表現ができるようになった。

譜例 4 バイエル 91 番

Allegretto

dolce

(全訳バイエルピアノ教則本 pp.66 全音楽譜出版部編 全音楽譜出版社 1955 を底本として作成)

バイエル 91 番は、楽譜の読み方として調性はイ短調から中間部の転調、リズムは 16 分音符を学習する。ピアノの奏法としてバスの保続、メロディと伴奏のバランス、調性の変化の音色作りについて学ぶ。

学生 1 は最低音を抑えたまま奏する左手に力が入ってしまうので、脱力を指導した結果、22 回目のレッスン時には滑らかに弾けるようになった。学生 2 は 9 小節めでイ短調からハ長調が変わるところ

で和声をよく聴く練習をした結果、転調を感じとることができ、15 回目には表情豊かに演奏できるようになった。

譜例 5 バイエル 102 番

Moderato

dolce

legato

cresc.

f

dim.

p

1/4

(全訳バイエルピアノ教則本 pp.73 全音楽譜出版部編 全音楽譜出版社 1955 を底本として作成)

バイエル 102 番はヘ長調で臨時記号も多く、リズムも複付点や 16 分音符など細かいリズムが使われている。また、左手が最低音を 5 指で押さえたまま内声を奏するなど技術的にもレベルの高い曲になっているため、楽譜の読み方の教材としても難易度が比較的高い。

学生 1 は、複付点と 16 分音符がころんでしまって楽譜通り弾けないので、片手ずつ 2 小節に区切りながらゆっくり練習し徹底して部分練習をした。難曲ではあるが、6 週間かけて最後まで弾き通すことができるようになった。学生 2 も 16 分音符でつまづいたが、テンポのとり方として 7 小節目、16 小節目をまず弾き、基準をここに合わせることで全体のバランスがとれるようになった。さらにリズム練習を積み重ね、複付点や 16 分音符が単に正確だけでなく流れるようなリズム感で弾けるようになった。

学生 1 は鍵盤楽器の未経験者なので、ピアノを弾く前に楽譜の読み方、ピアノの基礎的奏法の説明に時間を費やした。学生 2 は小学校低学年に 2 年間ではあるが、レッスンを受けているので鍵盤の位置が頭に入っており、楽譜を読む力、練習の仕方がわかっていて理解の早さが違った。学生 2 は経験者ではあるが長いブランクがあるため、未経験者の学生 1 と殆ど同じ内容で指導する必要がある。ただ鍵盤楽器の基礎があると 1 曲を短期間で習得でき、適切なテンポで弾けてミスも少ない。

「基礎技能（音楽）」の評価を行うために実施する試験は隔週に検定試験として授業内に実施した。学生 1 は緊張もあって弾き直してしまうことが多かったが、学生 2 は安定感があった。また授業では、

バイエル以外に厳選した童謡の弾き歌いを 1 年間に 10 曲習得することになっている（「おはようの歌」、「おべんとうの歌」、「めだかの学校」、「森のくまさん」など）。

童謡の弾き歌いでは、学生 1 はピアノ伴奏に歌が入ると余裕がなく演奏が止まることもあった。学生 2 は 11 月ころには 10 曲の学習が終わり、課題以外の童謡やバイエル教則本の課題以外の曲を学習することができた。

「基礎技能（音楽）」において、初心者に修得させる指導法と成果について、バイエルピアノ教則本に沿って述べてきた。「バイエル 教則本」をマスターすることは保育者として身につけるべき資質（童謡の伴奏やマーチ、アニメソングなどを自在に弾くことができる能力）を備えるための有効な手段であると考ええる。

バイエルピアノ教則本は楽典とピアノの技法を学ぶ基礎的な教材であり、バイエルを修得することは必須であるが、実際に保育の現場で演奏したり子供たちに指導するのは、歌の伴奏であり、マーチやアニメの曲である。音楽を通じて子供たちの感性を育み表現する喜びを養うには、1 年次の必修科目で習得した技能を定着させ、保育者のさらなるレベルの高い技能習得が必要である。学生 1 と 2 の指導の差異は習得の期間に顕著に表れたが、学生 1 は仕上げのテンポが遅く弾き直してしまうことが多い。学生 2 は、適切なテンポで弾けてミスも少なく、音楽的な表現までできるようになった。

学童時のピアノレッスンの経験は、未経験者と比較し基礎技能の習得においても優位であった。しかし、経験者は時に特異なくせを持ち、未経験者の指導と比較し困難な場合がある。今回の 2 名の学生の習得の比較では、学童期のピアノレッスンの経験が課題全般の修得に影響を与えていることがわかる。指の操作だけではなく、読譜やリズムなどの基礎知識の有無がピアノを習得するための基盤になっているといえるかもしれない。学童期のピアノレッスンの中で学んだ指使いや読譜やリズムなどが、年月を経てピアノを学ぶ場合にどのような影響を与えているのかについては今後の課題としたい。

ピアノ未経験者においては、楽器の奏法のみならず音楽全般に関する知識など学習すべき内容は多い。従って、保育士に求められるピアノの演奏力、子どもに対する音楽指導力を培うためには、それら多くの課題を効率よく習得できるように指導方法の開発を継続的に実施する必要がある。例えば読譜を習得するために、ソルフージュ的な基礎力をより徹底して指導するための方法などを実践することは効果的と考える。

（三村則子）

3. ピアノ既習者における指導について

本学の保育士養成課程における 1 年生の多くは、入学以前のピアノをはじめとする器楽の奏法や歌唱法を率先して学ぶ機会に恵まれてこなかったゆえに、必修科目「基礎技能（音楽）」を修了した段階であっても、単年度の学習だけでは経験が不十分であり、保育の現場において、前述したように文部科学省の「幼稚園教育要領」における「表現指導」の一環として音楽の楽しさや創造性を指導できるだけの技能が定着し得るものでないことは客観的に察せられる。その少ない音楽経験を補完するために、

3・4 年次に選択科目として「音楽演習」が設定されている。ここでは本学の「基礎技能（音楽）」を修了した学生を既習者と定義し、「音楽演習」における指導内容の実際について概論を交えて扱うこととする。

1) 「音楽演習」の目的

「基礎技能（音楽）」では、保育者が持たなくてはならない「ピアノの平易な楽曲が演奏でき、童謡・唱歌の弾き歌いがピアノを用いて実践できる能力」を鑑み、「基礎」の習得を目標に多くの楽曲の中から必要最低限と思われる課題を抽出して授業計画に盛り込んでいる。保育士を志す学生の入学前の音楽に関する経験や能力には個々に大きな開きがあるが、ピアノを全く弾いたことがなかった者も、1 年次の受講により、楽器を奏するための感覚（勘）が育ち、備えることが実感できる。

2 年次には音楽に関する設定課目がないため、3 年次で「音楽演習」を選択する場合、1 年間のブランクを経ることになる。そのため「音楽演習」では、まず 1 年次で培った勘を取り戻すことから始めるが、最終的な目標としては、保育の現場で保育士に求められるピアノを含む鍵盤楽器の演奏力を高め、園での生活に関わる挨拶や行事に用いられる童謡・唱歌を目的によって自由に使える能力を確立することである。あわせて音楽を用いた表現の具現化として、培った音楽的能力を駆使して、現場において音楽発表を行なうことができ、またプロデュースできるようになることを目指した指導も勘案している。

2) 「音楽演習」指導の実際

ピアノという楽器が保育の現場において音楽による表現指導にどれだけ利便で有効なツールであるかを確認しておきたい。

周知のことだが、音楽はリズム、メロディ、ハーモニーの 3 つの要素から成り立っている。この 3 要素について、菊池有恒は、『楽典 音楽家を志す人のための』⁴⁾の中で次のように解説している。即ち、リズム **rhythm** を「音や休止の長短と音の強弱が組み合わされてできるものをいう。（中略）**rhythm** は **melody**、**harmony** にもまして音楽の根本をなしているもので、（中略）時代や民俗の違いによってそれぞれ独自の **rhythm** 様式があり、音楽を特徴づけている。**rhythm** は無秩序に並べられているものではなく、一定の時間ごとに刻まれるビート **beat**（拍）にのって作られている。なお、テンポ **tempo**（速度）は、**beat** 間隔の長さによって定められるが、楽曲のほとんどは 1 分間に 40～300 回打つ速さの範囲内で作られている」とし、メロディ **melody**（旋律）を「厳密にいうならば音の高低のみを指すが、現実には **rhythm** のない **melody** は存在しない。楽曲に使われている音の高低の組み合わせをまとめ、順次に並べたものを音階 **scale** という」と定義している。そして、ハーモニー **harmony**（和声）を、「高さの異なるいくつかの音の積み重ね（和音）の連結をいう。（中略）機能と声の発達に伴い和声の連結による調性音楽が誕生し、古典派以降では単旋律に和音の伴奏を伴ったホモフォニー **homophony** 様式が主流となった」としている。

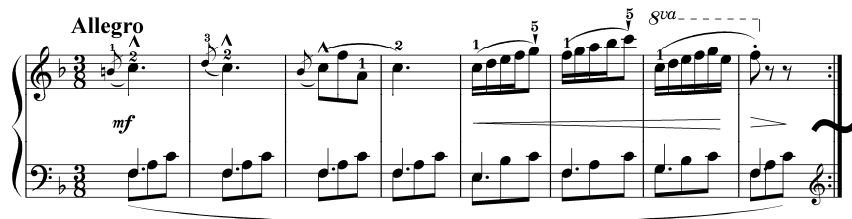
楽器には管楽器、弦楽器など多種存在するが、音楽の 3 要素を 1 人で表現できる手段が、ピアノを

はじめとする鍵盤楽器である。もちろん、ヴァイオリン、チェロなどの擦弦楽器類は、弓で複数の弦を同時に擦ることによって複数の楽音を奏することができるし、ハープ、ギターなどの撥弦楽器類は、同時に複数の弦を撥することによって可能だが、音階を構成する音がキーボードに割り当てられているピアノは、弦を押さえるなどの難度の高い技術を要しないで、比較的簡単に目的の音を出し、広い音域が扱えることが出来る利便なものといえる。長岡敏夫⁵⁾は「ピアノぐらい人間工学的にいても優れた楽器は他にない。椅子に座するというもっとも楽な姿勢で、肩、肘、手首、指の関節を動かして打鍵すればだれでも思う音が得られるのである。それに譜面と鍵盤との関係が自然で、無造作に鍵盤に手を置いても 5 本の指はドレミファソの位置にある。音域は、オルガンを除けばどの楽器よりも広く、さらに歯切れの良い音色とピアノの魂ともいわれるペダルを持つことによって、その魅力は他の鍵盤楽器をしのいでいる」としている。

保育や指導の現場では、1 人の保育者が複数の子ども達をみるのが通常の形態と考えられる。例えば、音楽を共有する時間において、子ども達が知らない歌を歌おうとする時はもちろん、すでに知っている歌を歌おうとする時であっても、保育者が率先して範を示す、あるいは歌って聴かせる場合、歌うだけでは、なかなか先述の「音楽の 3 要素」が伝えにくいといえる。ピアノを使うことで、明確にビートを刻み、拍子の存在の上にメロディがリズムやハーモニーを伴って成り立っていることが伝えやすくなる。最も重要なのは、子ども達の目の前で、保育者がやってみせることで、子ども達は表現の可能性を瞬時に察知し、もともと備えているであろう創造性が刺激され、音源や映像ソフトなどからは得られない生きた模範に感じ入るに違いない。

鍵盤楽器の代表であるピアノの技法を会得するために、伝統的に用いられてきた教本「バイエルピアノ教則本」は、保育の現場で扱われる童謡・唱歌の伴奏を奏するために必要な技能を習得するための教材として有効なものである。本学でも 1 年次の「基礎技能（音楽）」において、バイエルピアノ教則本のマスターを目標点として掲げている。しかし、前述のように学習者が本学入学以前に楽器の学習の経験が全くない場合、1 年間という期間ではピアノを自由闊達に扱うまでには簡単に至るものではない。一方、保育士の就職試験では、音楽に関わる技能を検査するために、バイエルピアノ教則本第 100 番を試験課題として課す場合が少なくない。したがって、「音楽演習」においては、バイエルピアノ教則本 第 100 番が確実に演奏できることを目安としている。

バイエルピアノ教則本 第 100 番



(譜例は、全音楽譜出版部 編 全訳バイエルピアノ教則本 pp71 全音楽譜出版社 1955 年 を底本として作成した)

現実的にピアノによる楽曲の演奏に際して求められる力とは、円滑で安定した発音（打鍵）、楽音としての価値が高い表情のある音、明確な動機の主張と小楽節・楽節構造の整った構成である。

円滑で安定した発音のためには、習得しようとする楽曲を完全に覚え、鍵盤上で指の迷いをなくさなくてはならない。保育の現場で扱われる楽曲はその規模にかかわらず、主たる動機を中心として同じ音形が何度も現れることがほとんどである。円滑な発音のためには、長く楽器に親しむことが理想であるが、限られた期間内において演奏可能な楽曲を複数習得するのは、相応の工夫が必要となる。すなわち、楽譜に記された音符をやみくもに順に楽器の音に転換するのではなく、楽譜をよく俯瞰的に眺め、共通点を把握し、練習の効率を高める必要があるのである。表現の手段が楽器による、ということは、目で楽譜の音（音の高さ、音価）を確認し、相当する鍵盤を前後の音形の処理を踏まえた適当な指が正しいタイミングで打鍵し、それが表現の意図に叶った音であったかを発音と同時に確認、というような所作を絶えず行なわなくてはならない。そのため、楽譜を見た瞬間に記譜された音が意識の中であたかも鳴っているかのように感じ取れるのが理想である。上江洲玲子⁶⁾は、「譜面に書かれた音を読みながら、その実際の音高、響、あるいは強弱までも自分の内なる耳で聴くことはひじょうに大切なことで、これが目でとらえたものを即時に手に伝えるのに大きな役割を果たすのである。読譜をしながら耳で音を聴くことをしないと、演奏して出てきた音を、初めて認知するということになり、はなはだ心とないことになってくる」としている。ただ、そういった能力は個人差が大きく、音楽的経験の量に基づくものでもあるので、大概の場合、単調ではあるが、動機あるいは小楽節単位の反復練習によって慣れていく。実際の留意点や続々と並ぶ音への対応も含めて、運指や鍵盤の位置関係を根気よく繰り返し、授業時間内に学習者が納得いくように要点を絞って指導をする。技能の習得には日常的な練習が最も効果的だが、1年程度の既習ではなかなか効率的自主練習の方法が定着されるものではない。地道なことではあるが、手順を何度も反復することは習得の基本である。また、それに徹底して付き合うことも指導のポイントになる。

特に童謡・唱歌の伴奏では、子ども達が歌を覚え、歌唱する際の音程を確保するために、右手は常にメロディを奏する必要があることから、それらを簡略することはできないが、左手が扱うパートについては、メロディを支える和音（コード）の中の主たる一音に音を絞り込むことで、楽曲の雰囲気損なわずに表現することができる。学習者の能力に応じて個別に楽曲のアレンジを施したものを学習メニューとして練習方法を含めて提示し、その結果学習者が取り組むべき課題楽曲の演奏に可能性を見出し、練習に向けて意欲を持つように徹底することが必須と考える。楽曲を安定して演奏するための基本事項は、「基礎技能（音楽）」を経ても、それ以上に経験豊富であっても変わるものではない。ピアノの奏法上の要点を挙げると、次のようになる。

楽音としての価値が高い表情のある音は、打鍵の際のタッチ、つまりキーを押し下げる時の力の与え方にコツがある。ピアノを学ぶ初心者の中にはキーを一つ押し下げる度に、腕全体が上下動してしまう例が多いが、それでは自らの動きにある程度の負担を感じる割には、思うような質の音が出ないばかりか、円滑な流れを阻害してしまう結果となる。改善のポイントは、指先の第3関節、指の付け根、手首の3点で自らの腕全体の重みを支えることに尽きる。特に手首がキーの位置より下方にま

で落ちてしまう弾き方では、楽器の音を発音させるに足る力を指先に伝えることはできない。楽音としての価値が高い音とは、キーの落とし込みは速く、与えた力を先述の3点の関節で瞬時に支えることによって、非常に立体感のある響きの良い音を得ることである。余村吉一⁷は医学の専門の立場から、解剖学的、神経学的見地で「ピアノの練習と身体機構」という知見を著している。その中で「打鍵運動の基本と身体機構面からの裏付け」として「打鍵開始前には、総指伸筋〔手の甲の筋肉〕の収縮によって第1関節〔指の付け根〕が伸展し、指先が高く拳上しなければならない。そして虫様筋〔手の平の筋肉〕および骨間筋〔手の平の筋肉〕の収縮によって第1関節が屈曲し、打鍵が行なわれるが、その際に、第1関節のみが屈曲して、打鍵に及ばなかった他指のそれは穏やかに固定されたままであること、第2〔指の中程〕および第3〔指先〕関節は緩やかな固定状態を保ち、第1関節の屈曲による力が指先に平滑に伝達されて、打鍵力となること、筋の収縮速度と最終的に得られた筋の収縮力（筋力）とを自由に調節して、適切な音量を確保できること、などが必要となる」と述べている。（〔 〕内は筆者補足）このことは、現在指導しているピアノ演奏における肩から指先に至る「手」の動きについて、医学的な立場からも根拠のある理論的説明であろう。

明確な動機の主張と小楽節・楽節構造の整った構成とは、楽音の強弱、音色、ピアノならではのハーモニーの変化などを駆使して、音に意味を込めることである。そのことで、聴き手に音楽の価値観をより高めて伝えることができる。どのように正確に音を発音させたとしても、各々の音が互いにニュアンスを持たなくては、単に音の羅列に過ぎなくなってしまう、聴き手の意識に考えを伝えることはできない。音楽構成上の左右の手の役割に応じ、常に的確な音量のバランスを保ち、主たるメロディには、1節毎に言語で言うところのイントネーションのように、一音一音前後の関係を築くために、細かく音の性格決めをしていくことが必要である。これにおいても、先述の3点の関節による支えは奏法上の要点として深く関わる。

これらの観点を、あまり理詰めで追い求めるよりも、実際に演奏してみて、それが音楽としての価値観が高まった表現になったかどうかを自らが実感、体感することが重要である。そのために、指導者が良い例、悪い例を学習者に示して、彼らが客観的に違いを実感でき、自らの問題点を改善する意欲と手立てを与える。この「客観的な判断」は、分野を問わず能力発揮のためには重要かと考える。

バイエルピアノ教則本修了程度の技能で音楽的表現の学習に適当なのは、各曲が標題を持ち、小規模で明快な構成の楽曲が盛り込まれたブルグミュラー作曲「25のやさしい練習曲集 作品100」であろう。ロマン的作品として、標題から情景や登場人物、心情などが連想され、音楽によって表現者の印象を楽音で創造的に具体化するのに適している。また、曲集内の楽曲は、場合によってマーチとして、あるいは絵本や童話の読み聞かせの挿入音楽として、創作劇などの演出にも応用がきく。「音楽演習」では、バイエルピアノ教則本の演奏能力が十分に備わった学生には、これらのキャラクターピースとしての佳作に取り組みせ、ピアノによる音楽表現の手法を、前述の楽音としての価値のある奏法を用いて演奏できる能力を養う機会を与えている。

Andantino

p dolce cantabile

p

Allegretto

p *cresc.* *sf* *p leggiero*

– 75 –

キーボード・ハーモニー（鍵盤和声）の学習を取り入れていくことも有効な手段と考える。矢内潤子⁸は、キーボード・ハーモニーの学習による効果を7項目挙げ、「①和声進行を把握できるようになる。②旋律と和声進行の関連性を意識できるようになる。③調性ないしは調を分析する能力が作られ、楽曲の構成や形式と和声進行との関連性について認識が深まる。④暗譜能力が発達する。⑤初見能力が発達する。⑥アンサンブル（四手連弾なども含む）にたいしての理解が深まる。⑦旋律に伴奏付けをしたり、即興演奏や創作を行なうことへの手掛りが与えられるため、視野が広がり、自主的な学習態度に目覚める。その刺激が、音楽的能力の総合的な発達につながる」としている。これらを指導に導入するためには、音楽の基礎たるソルフェージュ（音感）能力の向上、楽典知識の理解を伴っていく必要があり、解決すべき問題が存在すると考える。

演奏能力の定着のためには、要領よく練習を積み重ねることが最も重要だが、学生達に授業時以外に練習を実践することをいかにして促すかも大きな課題である。本学の音楽室のピアノ（デジタルピアノ、デジタルキーボードを含む）は、授業で使用していない時には、事前の申し込みをすることで自由に練習のために使用することができる。自宅に楽器がない学生も多いため、学校での練習を奨励しているが、さらに徹底したい。また、ピアノの演奏力は個人的技量に基づくものではあるが、音楽の理解、向上のために、ディスカッションの機会をもって自ら疑問を呈し、また客観的な視点にたって判断が出来るかを主導することも有効かと思う。

（平田博通）

4. 音楽の総合的能力指導 ―童謡、歌唱について―

幼児の音楽教育では、歌う、聴く、踊る、楽器に親しむ、合奏するなどの内容を扱うが、保育者にとって歌唱の学習はとりわけ重要なものである。この点について服部公一⁹は次のように述べている。「音楽はリズム・メロディー・ハーモニーの三位一体である。その中でもメロディーが大切なのは申すまでもない。理想を言えば幼児の日常的存在であるお母さんや先生が、心をこめて歌唱してこそ、その歌の印象が強く子どもにうつるのだと思っている。先生が弾き語りでしっかりと歌い込んだ歌は幼児の感性にしっかりと収められ、一生ものとなるのだ。」

ここでは「歌う」という事に関し、その重要な教材となる「童謡」と、その「歌唱」の学習の意味を考察する。

1) 「童謡」についての考察

「はじめに」に於いて述べた通り、2008年4月1日より施行された厚生労働省による「新保育所保育指針」では、「第7章 3歳児の保育の内容」において、「(2)音楽に親しみ、聞いたり、歌ったり、体を動かしたり、簡単なリズム楽器を鳴らしたりして楽しむ」、「第8章 4歳児の保育の内容」において「(2)友達と一緒に音楽を聴いたり、歌ったり、体を動かしたり、楽器を鳴らしたりして楽しむ」、「第9章 5歳児の保育の内容」において「(2)音楽に親しみ、みんなと一緒に聴いたり、歌ったり、

踊ったり、楽器を弾いたりして、音色の美しさやリズムの楽しさを味わう」、「第10章 6歳児の保育の内容」において「(2)音楽に親しみ、みんなと一緒に聴いたり、歌ったり、踊ったり、楽器を弾いたりして、音色やリズムの楽しさを味わう」ことが目標として掲げられている。

幼児が美しい音や楽しい音楽に出会えると、それを全身で感じ、声や体の動きで表現するさまはしばしば目にする光景である。こうした点から考えると、童謡のなかには幼児が自然に、また自由に表現し楽しめる楽曲が多く存在する。童謡には幼児の生活に密着したもの、例えば挨拶の歌、行事の歌、物語の歌など様々なものが含まれるが、どの種類の童謡も歌詞が親しみやすく、リズムは簡易であり、メロディは覚えやすく曲全体の印象は明るく楽しい、などの特徴を共有している。すなわち楽しみながら歌い、表現し合いながらみんなで歌う楽しさを経験させ、総合的な音楽の発達に導いていける教材が童謡である。

2) 保育者における歌唱の重要性について

一般に幼児は、楽譜を読むのではなく聴唱法によって歌を覚えていく。それだけに保育者には自然な発声、正しい音程とリズム、明確な発音で範唱できることが求められる。童謡を幼児に指導する時も保育者が是非習熟すべき大変重要な事柄である。

幼児に対する範唱を行うためには正しい発声の習得が不可欠である。具体的な発声の目標として声楽家エスター・サラマンは次の6項目を「日頃の心掛け」として述べている。¹⁰

1. よく開いた喉での吸気と、発声のために整えられた体の姿勢。
2. 最初の出だしの音の正しい出し方と、その感覚。
3. 母音の中心を捉えて発声すること。
4. 最も高い位置での共鳴を呼び起こすこと。(開いた喉でのハミング)
5. 母音の響きを深めること。(ヴィブラツィオーネ)
6. メッサ・ディ・ヴォーチェ

上記の点を踏まえながら保育者として必要な歌唱における注意点を述べることにする。まず姿勢であるが、両足を肩幅よりやや狭く広げた幅でリラックスして立つ。呼吸は横隔膜をしっかり張った状態で呼吸をコントロールする腹式呼吸の習得を目指す。口の開け方はあごの力を抜き、喉の奥がよく開くようにする。共鳴の仕方は息を目や眉間のあたりに響かせる。発声の練習時に母音の前にH、M、Nなどを付け、出だしの音を明瞭に発音することが必要である。メッサ・ディ・ヴォーチェの練習としてレガート唱法と息のコントロールによって強弱の付け方を学習する。

3) 本学における童謡指導について

前述した通り、幼児は、保育者の歌を模唱し覚えていくものである。それだけに保育者は正確な範唱となりえるよう童謡歌唱法を身に付けることが求められる。

本学における童謡指導のための教材の選曲には次の点に注意した。すなわち①実際に歌う活用頻度の高い幼児の歌。②歌唱法の技術習得に適した歌。③付点や連符など高度なリズムも習得できる曲の

3点である。

以上の観点により選曲された教材に関し、保育者が子どもたちを実際に指導する上での留意点を述べていきたいと思う。

むすんでひらいて



この曲は2拍子であり、行進曲としても、また多人数での「手遊び歌」としても楽しく、活用頻度の高い曲である。調性もハ長調で無理のない声域で歌える為、弾き歌いも楽に習得できると思われる。この曲を指導する時は、ハ行の子音に気をつけたい。ハ行の子音は強調するように発音しないと「はな」は「あな」に聞こえてしまうことがよく見うけられる。同様にこの曲には「ひらいて」という歌詞が度々出てくるので、保育者は、気をつけて範唱すべきである。

また「手をうって」の歌詞に出てくる促音便は、4分音符2つによるメロディにのせると「手をうーて」と歌ってしまうことがよくある。促音便であることを意識し、正しく範唱できるよう指導していきたい。

とんぼのめがね



秋の季節感漂う名曲である。昆虫を題材とした幼児の教材としては大事な一曲であろう。この曲も譜読みのしやすいハ長調でピアノとの弾き歌いとしては、演奏しやすい曲といえるが、歌唱の点からは、学ばなければならない点が多い曲といえる。4分の2拍子で8分音符の羅列が続くため強拍と弱拍を意識しないと、歌詞がぎくしゃくした感じになり1つのフレーズに聞こえにくいものになってしまう。また、息継ぎもしっかりと吸わないと、最後の「とんだから」が、途中で切れたものになってしまう。「らー」の部分は3拍分あるのできちんと伸ばすよう指導したいと思う。また「とんだから」の「か」と「ら」の間で息継ぎをする学生が多いが、日本語として不適切なものになってしまう。幼児は、保育者の歌をそのまま真似て歌うので、気をつけなければならないところである。

もりのくまさん

1. あ る ひ も り の な
か く ま さ ん に で あ っ た
は な さ く も り の み ち く ま さ ん
に で あ っ た

この曲は交互唱として、楽しさを実感できる貴重なものである。子ども達を2つのグループに分けて、交互唱を楽しむことを最終の目標として指導していくと良いと思われるが、最初は、保育者が「あるひ」と歌い、子どもたちが「あるひ」とエコーのように歌う練習をすることになる。保育者の歌ったフレーズを即座に子どもたちが模唱するのであるから、保育者は発音、音程に留意し歌わなければならない。「あるひ」にも「もりのなか」にも刺繍音という非和声音が使われている為、半音の音程が出現している。この派生音を正確に歌えるよう保育者は練習を積むべきである。また、「スタコラサッサ」や「トコトコトッコ」などユーモラス感を出すように促音便をきちんと意識して歌わなければならない。

どんぐりころころ

1. どん ぐり ころ ころ

どんぶりこ おいけにはまって さあ たいへん どじょうがでてきて

こんにちは ほっちゃん いっしょに あそびましょう

物語風の歌詞が魅力の、秋の季節に必ず取り入れたい曲である。16分音符が多い曲なので、速く歌いがちだが、伸びやかな感じで歌えると良い。「どんぐり」、「ほっちゃん」などに出てくる濁音は正確に発音したい。「はまって」の部分の促音便を、「はまあて」と発音しがちなので注意しなければならない。また「どんぐりころころ どんぶりこ」を「どんぐりころころ どんぐりこ」と間違って記憶している学生が殆どであることに驚かされる。子ども達には正しく伝承することが望まれる。知っている曲だと思ってもその記憶が正確であるか確認する必要がある。

「あそんだが」の「が」は鼻濁音である。鼻濁音と濁音の区別も、保育者がしっかり区別して、明確な発音ができるよう指導していかなければならない。

いぬのおまわりさん

まいごのまいごの こねこちゃん

あなたのおうちは どこですか おうち を ぎいても わからない なま

え を ぎいても わからない ニャン ニャン ニャニャーン ニャン ニャン ニャニャーン

な いてばかりいる こねこちゃん いぬの おまわりさん

こまてしまて ワン ワン ワンワーン ワン ワン ワンワーン

幼児にとって最も身近な動物である犬と猫を人間化し物語にした歌詞は、全ての幼児に好まれる曲として定着している。シンコペーションのリズム、3 連符のリズムなど、複雑なリズムが多く出てくるが、言葉の自然なイントネーションから生まれたリズムなので、その点を考慮し、正確に範唱できるよう指導していかなければならない。「ないてばかりいる」の「ばかり」の部分の 3 連符は 1 拍を 3 等分したリズムとして歌わなければならないが、ほとんどの学生は 16 分音符 2 つと 8 分音符になってしまう。これでは「ばかり」が「ばかりー」となってしまうのでこの点も学生が正確なリズムで歌えるようにしなければならない。「い・ぬ・のー」の部分に、8 分休符が入っているところを「いーぬーのー」と歌ってしまう学生が多いので注意を払う必要がある。最後の「ワンワンワンワーン」の「ワンワーン」の部分は音程が「1 点嬰へ」から「1 点ニ」に下がるところだが、オリジナル伴奏を使用すると、右手が「1 点嬰へ」から「2 点ニ」に上がっている。その伴奏譜を使用すると、学生はピアノにつられて音程がとれなくなるので、練習を積んで習得できるよう指導していく必要がある。

めだかがのっこう

めだかがのっこう

1.め だ か の
2.め だ か の
3.め だ か の

が っ か っ
こ こ う は
か め う
わ だ れ
の か し
な た そ
か ち う
そ だ み
っ れ ず
と が に
の せ い
ぞ い が
い と れ
て か て

み せ っ
て ん
ご せ
ら い い
ん か つい
そ だ み
っ れ ず
と が に
の せ い
ぞ い が
い と れ
て か て
み せ っ
て ん
ご せ
ら い い
ん か つい

み ん
な
で
お
ゆ
う
ぎ
し
て
い
る
よ
ろ
ん
な
で
お
げ
ん
に
あ
そ
ん
で
る
い
つ
い

小川の中のめだかが隊を組んだり、ぱっと散ったりする様が目に浮かぶかわいい曲である。「そつと
のぞいてみてごらん」は2回繰り返されるが2回目はピアノニッシモとの指定があり、子供たちに歌唱
による強弱を表現する曲として貴重である。この部分の「みてごらん」の部分は、1番2番のメロディ
と、3番のメロディは、歌詞によるものから変えなくてはならない。ここはよく理解し、範唱できる
よう指導する必要がある。この曲の最後の「つーいっい」の部分は付点4分音符、8分音符、2分音
符と歌うところであるが、ピアノ伴奏を譜面通り弾くと、歌のメロディが、4分音符、8分音符2つ、
2分音符となってしまう。つまり、最後の2分音符に「つーい」と入らなければならないものが「い」
と入ってしまうので、ピアノ伴奏を歌のメロディ通りに弾くなどの配慮や工夫をして指導していかな
ければならない。

4) 童謡指導についてのまとめ

本論では保育者における歌唱の重要性と本学における童謡課題曲の具体的な演奏上の注意点を述べ
てきた。「歌う」ということだけでも、音程やリズムの正確さ、明確な歌詞の発音、十分に響く声の出
し方など習得しなければならない技術は多いのだが、それに加え保育者は「ピアノ伴奏を入れながら
歌う」という技術の習得も求められている。

本学の学生は入学以前の音楽経験がピアノ学習に関しても殆ど無い学生が大半を占める。そのよう
な学生にとって「ピアノ伴奏を入れながら歌う」ということは大変難しい課題である。この「ピアノ
伴奏を入れながら歌う」ということがどうしても困難な学生に対して、教員がこれから更に工夫して

いかなければならない点は次の3つである。①音程のとりにくい学生には歌部分の音程がとりやすいようピアノの右手部分は常にメロディを奏でる状態に編曲する。②ピアノ伴奏部分のリズムやテクニク上難しい箇所は簡易化し、「歌う」ことに集中できるように配慮する。③簡易化された伴奏を使用する時は歌唱力が一層求められるので、メロディや歌詞が幼児たちに十分伝わるような歌唱の技術習得のため、弾き歌いのレッスンと同時に歌だけの指導も積極的に取り入れる。

最後に学生に求められることは十分な練習時間を確保し努力を重ねることである。入学以前にピアノの経験が全く無い生徒でも十分な練習をして授業に臨む学生は「童謡の弾き歌い」を見事に演奏し、多くの曲を自分のレパートリーとすることができている。練習の積み重ねが結果を生み出していくため、いかに練習時間を確保していくかの指導が必要である。

(根岸恭子)

5. 音楽指導における「手遊び歌」と「合奏」

1) 幼児の音楽表現

本学では、現在「手遊び歌」は主として1年次の必修科目である「基礎技能（音楽）」で扱い、「合奏」は3、4年次の選択科目である「音楽演習」で扱っている。

1999年10月の「保育所保育指針」¹¹⁾によると、「保育の目標（力）」の「様々な体験を通して、豊かな感性を育て、創造性の芽生えを培うこと」が、音楽の担う部分にあたる。1989年にそれまでの「音楽リズム」に代わり、「表現」という領域に改定されて以来のことである。すなわち、幼児の自発的な体験を重視し、「感じたことや思ったこと、想像したことなどを、様々な方法で工夫して自由に表現する」¹²⁾ことをねらいとし、保育者にはその手助けが求められる。また、配慮事項として、「表現しようとする気持ちを大切に、生活や経験、能力と遊離した特定の技能の習得に偏らないように配慮する」とある。井口太¹³⁾によると、幼児の音楽指導における問題点として、行き過ぎた鼓笛隊や合奏の練習、リトミック指導の例が挙げられている。

では、「保育の目標（力）」にある「様々な体験」というのは、音楽活動の領域において、具体的にどのようなことを指すのか。それは、音楽を聴くこと、歌うこと、音を出すこと、音楽に合わせて動くことなどであろう。そして、その体験が、幼児が主体となっただけで終わっていかなくてはならない。つまり、誰かに指示されるものではなく、音楽を聞いただけで身体を動かしてしまう、歌ってしまうなど自然に行われるものであることが求められる。このような幼児主体でない教師主導の例は、前述の行き過ぎた練習、指導の通りである。

幼児の主体性を尊重しつつ音楽教育を進めるにあたって、保育者には幼児を適正に観察し、どのように援助すれば良いのかを把握しておく必要がある。そのためには、幼児の音楽的な発達の特性についての理解が不可欠であろう。

桶谷弘美¹⁴⁾は、子供の成長・発達に伴う音楽との関わりについて書いた『「音楽表現」の理論と実際』で、子どもの音楽的発達段階について年齢別に解説をしている。それによると、0歳から1歳半まで

は受動的リズム運動時代であり、この時期の子どもは親が音楽に合わせて揺すってやったり、拍子をとってやったりすることによって、音楽を享受し、音楽を聞くことの喜びを味わい、身体を動かして反応する。1歳半から3歳までは発動的リズム運動時代であり、運動能力の発達にともない、身体や耳に与えられる音や音楽に対して、身体全体で反応を示す。また、好きな音楽を繰り返し聴いて喜ぶようになる。とくに3歳ごろになると自分の好きな曲を指定して、聴かせてくれるように要求したり、自分で聴こうとする。3歳から6歳までは模倣時代とされ、もっとも基礎的な習慣形成がなされる重要な時代である。周囲の人々の真似をするようになり、簡単な曲などは聴いて覚えてしまうようになる。

保育者は、上記のような幼児の発達における特徴をふまえて、適切な音楽を選び、聴かせる工夫をすることが大切である。では、どのような音楽を選んだらよいのか。それは、質の良い音楽であると同時に、幼児が喜んで聴く音楽でなくてはならない。乳児期には静かな、落ち着いた美しいメロディーのもの、幼児期には聴いてイメージしやすいもの、メロディーがリズムカルで躍動感があり、生き生きとして楽しいものと、前掲書の中で挙げられている。これは、これから述べる手遊び歌、合奏だけでなく、本稿4章で論じられた童謡や歌唱にも通じることであろう。

2) 手遊び歌

幼児にとって一番身近にある簡単な遊び道具は、指や手である。音楽的発達だけでなく、身体的な発達が著しい時期である幼児期においては、指先、手先など身体を使うことは身体的発達を促進させるし、リズム感を養い、想像性や言葉を育てることもつながる。また、周りの人（親や保育者、友人）と手遊びを行うことで、社会性・協調性が身に付く¹⁵。

一方、保育者の側からみれば、手遊び歌は道具も事前準備も要らず、どんな環境でも、わずかな時間ですぐ出来るという利点がある。さらに幼児の散漫な注意を集中させたり、気分転換させたりできるものでもある。また、わらべ歌のようなものは、先人から受け継いだものを次世代へとつなげる文化の伝承の役割も担っている。

手遊び歌を授業で扱う際には、DVD付き教材¹⁶を使用し、メロディー譜・動作が書かれたところをプリント配布したうえで、①楽譜を見て歌唱指導、②DVDを見て動作の確認、③ピアノ伴奏付きで、④ピアノ伴奏無しで、という順に進めている。歌唱に関しては、正しいリズム、音程はもちろんのこと、曲に合った表現力（例えば、音の強弱やニュアンスなど）が、動作に関しては、魅力的な表現（例えば、振りの大きさなど）が求められる。前述のように、手遊び歌は道具を必要としないことを利点としているが、ピアノ伴奏があれば、単旋律だけにはないハーモニーの広がり生まれ、幼児の感性に届くものと思われる。しかし、実際の現場では、ピアノなどの音板楽器が身近にあるとは限らず、たとえあったとしても二人一組で、ピアノ伴奏と動作を行う者々に役割分担しなければならないので、ピアノ伴奏無しの訓練を十分しておく必要がある。その場合、最も留意すべき点は、幼児の声域である。その範囲から外れる高い音、低い音がないように始めなければならない。その意味では、楽譜に書かれている開始音が良い目安となるだろう。

「基礎技能（音楽）」で取り上げている手遊び歌は以下の三曲である。四つの表情を動作で表現し、最後には手を膝に置いて保育者へ注意を向けさせる「とんとんとんひげじいさん」、体の大きさが違う小人と象を、動作と声の大きさに表現する「いとまき」、5本の指を順に1本ずつ出す動作の「あおむしでたよ」である。

譜例「いとまき」

①～② い と ま き ま き い と ま き ま き ひ い て ひ い て とん とん とん

① で き た で き た こ び と さ ん の お く つ D.C.
② で き た で き た こ ぞ う さ ん の お お く つ

本科目の受講生は、検定において、この三曲を発表しなければならない。声量があり、きちんと聴こえるか、振りを正しく覚えているか、スムーズに行うことができるか、表情豊かに行っているか、などが評価の観点となる。

また、筆者の「音楽演習」のクラスでは、全員が4年生だったため、手遊び歌を実習現場で使いたいとの希望があった。そのため、実習前に練習をした。その手遊び歌は教材の中から、学生たち自身を選択した。曲名と選択理由を以下に記す。

- ・アイアイ（「アイアイ」と何度も応答して繰り返すところが楽しい）
- ・まつぼっくり（昔から歌われていて、親しみがある。まつぼっくりと猿の様子が想像しやすい）
- ・キラキラぼし（簡単なメロディーと振り。ゆっくりしたテンポで静かにおこなえば、年齢の小さい子どもに適している）
- ・おべんとうの歌（リズムが楽しい。食べ物の歌で興味を引く。サンドイッチバージョンも楽しい）
- ・やきいもグーチーパー（想像しやすい内容の歌詞で、最後にじゃんけんをするのも楽しい）
- ・おにのパンツ（テンポが速く、振りも難しいので年長の子ども向き。パンツという言葉に楽しく反応する）

実習後の報告では、大変役に立ったということだった。

実際の授業で分かった事は、歌も動作も記憶できたと思っていても、人前で披露するには十分な練習が必要であるということである。また、リズム良く、音程良く歌えても、声量が少なかったり、無表情では人に伝わらない。逆に、表情があつて、動作に魅力があれば、惹き付けられる。ピアノ奏法のレベルに関係なく、表現力、個性によって魅力的なパフォーマンスになり得る。手遊び歌はこれまで論述してきたように、手軽でありながら、幼児の様々な発達を促すものなので、保育者を目指す学生は、たくさん覚え、いつでもどこでも自信を持って発表できるよう練習を重ねて、自分の持ち物と

なるまでにすべきである。

3) 合奏

本学では、2007年度より指定保育士養成施設が設置され、それに伴って「基礎技能（音楽）」も2007年度より開講された。一方、合奏プログラムが組まれた「音楽演習」は、3、4年生の選択科目であるため、2009年4月からの開講となった。従って、本年（2010）度がその2年目にあたる。

この科目では、履修生が「基礎技能（音楽）」で学んだピアノ奏法、童謡弾き歌いの充実を図るとともに、新しく合奏の技術を学ぶこととなったため、その開講にあたって楽器購入がなされた。保育園によっては、所有楽器が充実していないことも考えられたが、実際幼児が演奏するだけでなく、保育者自らが演奏し、幼児に鑑賞させる場合も考慮して、幼児が取り扱いやすい楽器だけでなく、広い範囲から購入楽器の選択をした。以下に、順に、購入楽器名、その個数、購入に至った理由を記す。

【打楽器】	木の楽器	ギロ（1）	音色が魅力的
		クラベス（1）	扱いが簡単 音色が魅力的
		マラカス（1）	音色が魅力的
		カスタネット（5）	扱いが簡単
		二音ウッドブロック（1）	二つの音の高低が魅力的
	皮の楽器	タンバリン（1）	身近な楽器
		ハンドドラム 大（1）	大太鼓の代用品
		中（1）	小太鼓の代用品
	鉦の楽器	シングルスティック（1）	音色が魅力的
		トライアングル 大（1）	音色が魅力的
		小（1）	同上
		鈴（2）	身近な楽器 扱いが簡単
【音板楽器】		シロフォン（木琴）（2）	メロディーを奏でるのに必要 幼児には打楽器としても使用できる
		グロッケン（鉄琴）（2）	同上

3歳ごろになると楽器を見れば鳴らしたくなるなど、楽器に対する好奇心が出てくる。¹⁷自由に楽器を手に取り、鳴らせる環境を整えておくことも、保育園などの重要な役割である。最初は、楽器をただ叩いたり振ったりして、音を鳴らすこと自体に興味を示し満足していた幼児も、やがて、音楽に合わせて楽器を鳴らしたり、拍子やリズムを表現しようとする。その際大切なことは、保育者が楽器の持ち方、奏法を教え込むのではなく、幼児が保育者の楽しそうな様子を見て、興味・関心を持ち、自ら模倣して学んでいくように導くことである。そのためには、保育者自身が各楽器の特徴、正しい奏法を知らなければならない。保育者が、幼児にとっての「模倣のための適切なモデル」であるとい

う意味合いだけではない。実際の保育現場での指導を考えると、理想とする楽器が揃っていない場合もあり、そういう場合は、他の楽器で代用する必要も出てくる。従って、既存の楽譜が使用できず、保育者自らがアレンジしなければならないが、そのためにも、楽器について熟知しておく必要があるのである。

昨年度・今年度の既習曲は次の通りである。

- ・アイアイ
- ・犬のおまわりさん
- ・おもちゃのチャチャチャ
- ・こぶたぬきつねこ
- ・小さな世界

（「こぶたぬきつねこ」「小さな世界」は本学講師、平田博通による編曲）

授業ではどの楽器も習得できるようにするため、履修生が打楽器担当と音板楽器担当を交代して行った。身近な楽器であり、経験もあると思われるカスタネット、鈴、タンバリン、トライアングルであっても、正しい奏法を知らない学生もいた。音板楽器に関しては、読譜力のある学生、また、板の並びがピアノと同じであるため、ピアノ奏法のレベルが高い学生は、当然少ない練習時間で演奏できるようになった。また、授業では、パート譜（打楽器と音板楽器の 2 種）、総譜を配布している。パート譜だけを見て担当楽器の演奏に夢中になってしまっている学生が多いのが現状だが、他の楽器の音も確認しつつ、曲全体を見渡す能力も付けることが望ましい。

前年度の「音楽演習」では、前期末と年度末の二回、発表という形で試験を実施した。その試験のために、対象となる幼児を想定して、「基礎技能（音楽）」での学習を土台に、学生が身に付けた合奏や手遊び歌、童謡歌唱を組み入れた 30 分程度のプログラムを作りあげるための指導を行った。試験当日には、カラフルな手作りのプログラムが講師に配られた。内容は以下の通りである。

《前期》

1. 手遊び歌 : はじまるよ（全員で）
2. 合奏 : アイアイ（ピアノ 1、鈴 1、タンバリン 2、カスタネット 2、手遊び 2）
3. 歌唱
海（ピアノ伴奏による全員合唱）
七夕（ピアノ伴奏による全員合唱）

《後期》

1. ハンドベル : ドレミの歌、星に願いを
2. 合奏
さんぽ（鉄琴 2、木琴 2、トライアングル 1、タンバリン 1、ウッドブロック 1、ピアノ 1）
小さな世界（鉄琴 2、木琴 2、トライアングル 1、タンバリン 1、ギロ 1、ピアノ 1）

3. 歌唱

ピクニック（ピアノ伴奏による全員合唱）

世界中の子どもたち（ピアノ伴奏による全員合唱）

発表全体としては、もっと練習を積んでまとまりのあるものにした方が良い点も見られたが、「基礎技能（音楽）」の時には受身であった授業参加態度から、全員で企画・構成し、一つのものを作りあげていくという自発的なものへの発展が感じられた。また、楽器の特性への理解やその奏法の確立もなされ、ステップアップがみられた。一曲一曲の合間には、観客である幼児へ語りかけたり、歌唱では登場する動物のお面を作成し、被って歌うなど、幼児を楽しませようとする努力もみられた。

「音楽演習」開講 2 年目の今年度も、発表を学年末試験の一つとして行うこととなった。現在試験に向けて練習中である。今年度のプログラムを記す。

1. 手遊び歌

はじまるよ（全員）

2. 合奏

さんぽ（鉄琴 2、木琴 2、トライアングル 1、タンバリン 1、ウッドブロック 1、鈴 2、
カスタネット 2、ピアノ 1）

3. 歌唱

たきび（ピアノ伴奏による全員合唱）

ピクニック（ピアノ伴奏による全員合唱）

昨年度に比べ、履修生が増えたため、それにともなって合奏の際の打楽器の種類も増やし、その結果アンサンブルに、より厚みがでた。

幼児期の合奏は、リズムを身体で感じ、聴いて楽しみ、ひとつのアンサンブルを協力して創り上げる過程を体験させる大切な機会である。幼児でなくても、他人と心を合わせて音楽を作り上げることに、喜びを感じる人は少なくないだろう。大学における保育教育の役割としては、保育者として現場に出る前に、自らがその体験することに大きな意味があろう。音楽演習の授業における合奏は、まだ 2 年目で、これから更に発展させていかねばならない。今後楽器を増やしていくとしたら、ボンゴ、コンガ（皮の楽器）や幼児の手の大きさに合うフィンガーシンバル、または、マレットを用いて演奏するスタンドシンバル（鉦の楽器）、¹⁸オルフ楽器で、音板が外せるため 1 音、2 音での奏法が可能であり、ティンパニの代用ができるバス木琴（音板楽器）などが望ましい。「表現活動」としては、音楽単独の演奏だけではなく、絵本の読み聞かせなどに、楽器による擬音や効果音、物語の雰囲気合った音楽を挿入すれば、物語と音楽が一体となったパフォーマンスに発展させることも可能である。

（増崎靖子）

6. 音楽指導における課題についての考察

乳幼児期には人格の基本が形成されるため、その時期に人から愛しみをもって保育されることが重要であることは言うまでもない。子どもにとっては自己が尊重されることを楚として、その成長とともに様々な遊びや体験を通して知識や能力を旺盛に体得し、それらは身体能力の発達、感情的な表現の多様化などにより、さらなる人間形成へと展開していく。そのような様々な可能性を秘めた子ども達を保育する保育士が備えるべき資質は多岐に渡る。音楽に関する能力はその中の一つであるが、価値の高い音楽を子ども達に伝えていくために、どのような音楽を学んでいく必要があるかを考察し、保育士養成課程の開設から4年間の音楽の教授法について概括した。その中で、今後の課題となるものを以下にあげることとする。

第一は、音楽の技能をどのように学生に教授して獲得させるかについてである。保育者になるための教育をうける学生にとっては、楽器の扱いをはじめ楽曲の演奏・歌唱に不明な状態では、保育の場において、音楽を伝えることに甚だ不安がある。扱う楽曲が、完全に自らのレパートリーとなり、実践に堪えうるものとなる必要がある。しかし、その根底となる楽譜の読み方が不得手なままに過ぎる例が見受けられるのが現状で、音楽を保育の一環として扱えるようになるための技能の不足が否めない。そのためには、音楽教科の課程の中でドリルワークを課する、小テストを実施するなどの教育手法の考慮が必要であり、これまで実践を重ねてきた。その際、学生の読譜力のレベルによって、教授方法が異なってくるのが2章で明らかになったが、いずれにしても、入学後初年度の「基礎技能(音楽)」2単位のみでは、初めて音楽を学習する学生にとっては読譜力を身につけることは難しい。特に初心者にとってはピアノ演奏は楽譜の記述と鍵盤の相対的な関係を理解しているのではなく、演奏曲について指使いなどの手順と鍵盤の位置を暗記することで対応してしまう傾向が強い。それでは、既習曲しか弾くことができない。したがって、ピアノ初心者にも最も効率的な読譜の教授方法について更なる検討をする必要がある。また、ピアノ演奏に興味を持続していくためには、学生が興味をもった課題を設定し、伴奏を本人のレベルにアレンジしたりするなどの工夫が必要である。また、ある程度のピアノ経験者には、そのレベルに応じた読譜力を身につけることが、更なる演奏の発展を望むためには必要である。

第二は、音楽の楽しさを子ども達に伝えるための音楽に対する心構えの問題である。4、5章で述べているように、音楽は子どもにとって意志や感情を表現する手段であり、人とのコミュニケーションをはかる場合にも有効である。保育者としては、対峙する子ども達に音楽で表現する楽しさを伝えることが求められる。楽器を演奏するための技法とともに重要であるのは、「心情が音に託されているか」ということであろう。多感な乳幼児期に、歌や合奏を通じて保育者が与える「想い」は、極めて大きな影響を及ぼすものである。子ども達にとって、保育者の範を真似ることのできた価値観は、生涯にわたって持ちえるほどのものかもしれない。また、音楽の技法を学ぶと同時に、いかに歌唱や演奏で自己を表現することが楽しいことであるかを伝えることは保育者に求められることであり、そのための能力は保育者としての重要な資質であろう。そのためには、学生自身が音楽で表現することが楽しい

ことである体験が重要になってくるであろう。学生の意識の中には、「保育者に求められる能力の一つだから、仕方なく」という消極的姿勢も見受けられるが、音楽は、子ども達の可能性や感情、表現力を育むためにいかに重要なものかを理解することが重要である。それを理解するためには、音楽表現の教授法が検討されなければならない。また、音楽の教科だけではなく、その他の表現の教科目と総合的・一体的に指導していくことを検討していくことが必要となるであろう。

第三には、音楽教育が単にピアノ演奏だけではなく、歌唱や合奏などの広がりをもつことと関連して、今後音楽や体を動かす表現や造形などと総合的に自己を表現することの楽しさを体験する企画を立案することである。子どもが自己を表現するのは音楽においてだけではない。体を使ったり、ものを造ったり、様々な方法で自己を表現する。子どもが自己を表現することは、毎日の生活の中で自然なことで楽しい経験であり、それを音楽や体育、造形のように項目化し、分割できるものではない。日々の生活の中で子どもが自己を表現することを楽しめるように指導できる保育者であるためには、保育者自身が自己を楽しく表現できる体験を積み重ねなければならない。そのために音楽とその他の保育の表現科目とのコラボレーションを積極的に進めていくことが重要であろう。そして、体育や音楽、造形を習得し、それらを総合的に表現することを学び、学生自身が様々なプログラムを企画していく能力を発揮することのできるカリキュラムを体系づけることが重要である。

最後に、ピアノが弾けるようになるためには、週に一度の練習よりも日々の練習を継続的に積み重ねることが重要である。今後は「学生に、どのように継続させていくのか」ということが課題になるであろう。¹⁹

2011 年度からは、幼稚園教諭一種免許が取得できる課程がはじまり、これに伴い本学の音楽指導教科目が、より体系的に音楽を理解し、音楽を含めた表現能力を高める指導体系を構築することを今後の課題としたい。

-
- 1 厚生労働省 「新保育所保育指針」 2008 年 4 月 1 日施行
 - 2 文部科学省 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館 2010 年
 - 3 鶴川一郎 「バイエルに新しい息吹を」 『ムジカ・ノーヴァ』 3 月号 pp34 音楽之友社 1989 年
 - 4 菊池有恒『楽典 音楽家を志す人のための』 新版 pp27-30,1988 年
 - 5 長岡敏夫『最新 ピアノ講座第 5 巻 ピアノ実技指導法』 pp27 音楽之友社 1981
 - 6 上江洲玲子『最新 ピアノ講座第 4 巻 ピアノ初歩指導の手引きⅡ』 pp127 音楽之友社 1981
 - 7 余村吉一『最新 ピアノ講座第 3 巻 ピアノ初歩指導の手引きⅠ』 pp48-49 音楽之友社 1981
 - 8 矢内潤子『最新 ピアノ講座第 4 巻 ピアノ初歩指導の手引きⅡ』 pp70-71 音楽之友社 1981
 - 9 服部幸一『子どもの歌がわかる本』 pp24-26 チャイルド社 1995
 - 10 エスター・サラマン『声楽のこつ』 pp74 音楽の友社 1999
 - 11 「第 1 章総則」 保育所保育指針 厚労省 1999 年 10 月 29 日
 - 12 「第 10 章 6 歳児の保育の内容」 保育所保育指針 厚労省 1999 年 10 月 29 日
 - 13 音楽教育研究会編 幼稚園教諭・保育士養成課程用 幼児の音楽教育—音楽的表現の指導 pp.16-17 音楽教育研究会 2007 年
 - 14 桶谷弘美『[音楽表現]の理論と実際』 pp.22-27 音楽之友社 1997 年
 - 15 桶谷弘美 前掲書 pp.48
 - 16 『たのしい手あそびうた DVD ブック』 宝島社 2007 年。
 - 17 桶谷弘美 前掲書 pp.84

-
- 18 カール・オルフ (Carl Orff 1895-1982) ドイツの作曲、音楽教育家。独自の教育理念に基づいた楽器を考案した。
- 19 松原・久保・越智「保育者養成におけるピアノ実技教育についての一考察」(7) 松山東雲短期大学研究論集 第30巻 pp41 - 53 1999

日本音楽著作権協会 (出) 1016130-001 号

【参考文献】

第2章

音楽教育研究会編 『幼稚園教諭・保育士養成課程用 幼児の音楽教育—音楽的表現の指導—』 音楽教育研究会 1992 年

第3章

菊池有恒 『楽典 音楽家を志す人のための 新版』 pp27-30 音楽之友社 1988

音楽教育研究協会 編 『幼稚園教諭・保育士養成課程用 幼児の音楽教育—音楽的表現の指導—』 pp8-28 音楽教育研究協会 1992

園田高弘 『最新 ピアノ講座第6巻 ピアノ技法のすべて』 pp9-36 練習について 音楽之友社 1982

第4章

小林 満ほか6名編 『児童教育・幼児教育課程用 声楽指導教本』 教育芸術社 2006 年

音楽教育研究協会編 『幼児の音楽教育—音楽的表現の指導』 p167-184 音楽教育研究協会 2006 年

松山祐土編著 『簡易ピアノ伴奏によるこどもの歌名曲アルバム』 p19-43 ドレミ楽譜出版社 2009 年

永岡書店編集部編 『どうよう名曲選集』 p115 147 永岡書店 1991 年

第5章

登 啓子 「幼児の主體的な音楽表現活動についての一考察」 第34号 武蔵野音楽大学研究紀要 pp.101-114 2002

Study of music guidance

—Content of guidance and didactics—

Noriko Mimura • Hiromichi Hirata • Kyoko Negishi,
Yasuko Masuzaki • Hisa Shoji

Abstract

The Child Welfare course in the Faculty of Social Work Studies was started in 2007 and became fully operational in 2010. Here, we would like to write about the Music Education Program in the Child Welfare course, which started four years ago. There are three main points discussed in this paper. The first issue is the difference in piano teaching methodology to beginners and to those who have already learned how to play the piano. In both cases, the aim is to teach music reading skills. The second issue is about students' perspectives toward music. It is necessary for students to acquire a pleasure in music as a means to express themselves. The third issue is to make a curriculum, which enables students to express themselves by unifying music education with physical education and other creative work, and not to teach it as an isolated subject. We believe that having a program with these three elements will provide a sound foundation for the forthcoming pre-school education program.